



羅針盤

下村 裕

Yutaka Shimomura

山口大学大学院医学系研究科皮膚科学講座 教授



毛髪疾患を、一緒に楽しみながら学びましょう！

外来診療を行っている際に、初診患者の問診票の主訴に「脱毛」と記載されるとドキッとして身構える皮膚科医は結構多いのではないだろうか？ 円形の脱毛斑が1個だけあり、肉眼でも認識できる感嘆符毛がある患者であれば少しは安堵するだろうが、頭部全体でバサバサ脱毛している患者、強い紅斑や瘢痕を伴い脱毛している患者、さらには先天性脱毛症の患者に遭遇した際などには頭が真っ白になってしまう先生方もいるかもしれない。今回の毛髪特集号の責任編集者として、読者の皆さんに胸を張って“Please don't worry too much, take it easy！”と言いたいところだが、実は私自身も毛髪疾患に関しては知らないことが多々あるし、診断に苦慮することもしばしばある。

私自身は、25歳で前任地の新潟大学において脱毛症外来の担当になってから現在に至るまで、約23年間にわたり毛髪疾患に携わってきた。秀才であれば、そろそろ達人の域に到達してもよい年数だが、凡人の私はまだ道半ばであることを自認している。ただ、なかなか極められないからこそ、毛髪疾患の診療や研究には底なしのおもしろさがあり、探求心をかきたてられるともいえる。

毛包は、上皮系・間葉系ともに素晴らしい能力を有する細胞から構成され、正常の状態では免疫反応がおこりにくい特権を維持しながら一生涯にわたって活発に毛周期を営んでいる。毛包に先天的または後天的に何らかの異常がおこることで毛髪疾患を生じるわけだが、その異

常の種類や原因がきわめて多彩であることから、さまざまな毛髪疾患が存在する。毛髪疾患にアプローチするにあたり、まずは正常な毛包の構造・機能に関する知識を深めたうえで、各疾患がどのような異常で発症し、さらにそれぞれの臨床・病理組織学的所見を整理していくとよいと思う。そして、病態を踏まえて治療法について学んでいけば、きっと毛髪疾患に対する苦手意識は薄らいでいくのではないだろうか？ そこで、本毛髪特集号は、正常な毛包の構造・機能の話から始め、代表的な毛髪疾患について最新の情報を含め詳細に解説する総説に引き続き、興味深い症例を複数提示し、最後に脱毛症の診断法の極意で締めくくるという構成にした。

昨今、毛髪疾患に興味をもつ若手皮膚科医が減っている印象を受けているが、一番の原因是、乾癬やアトピー性皮膚炎のような画期的な治療法が少ないのではないかと感じている。しかしながら、毛髪疾患は近年、診断技術・治療法とともに着実に進歩しており、実は皮膚科領域のなかでもホットな分野になってきているので、その点も本特集号を通じて知っていただければと思う。

最後に、本特集号を編集するにあたりご執筆いただいた諸先生方とご尽力いただいた編集部の皆様に心より御礼申し上げます。それでは皆さん、本特集号を通じ、毛髪疾患について楽しみながら一緒に勉強し、苦手意識を克服しましょう！